

マックス・ブラック教授の講義

をきいて—アメリカ研究夏期セミナー—

森田良紀

わたくしはおそれと期待をかんじながらマックス・ブラック教授の開講をまつた。あたらしいアングロ・サクソン哲學の動きに通じてゐるひとならばだれもが教授の名にしたいいであらう。その多くの雜誌論文によつて、またわれわれのだれもが手にするであらういくつかの名高い著作によつて。ブラック教授の講義はわれわれにとつてのふかい驚きであつた。黑板はひとつの世界のごとくであり、その上に、この明晰な論理の魔術師の手に繰られて魅力ある圖示、圖解が自由にえがかれた。そのことが、どれほどわれわれを魅了したかは、講義を終えてのわれわれの別れの宴で、三宅教授が謙遜に賞讃の意味をこめて「Dr. David 教授とブラック教授をよばれたとき、同意をこめたわれわれの拍手をあげた一事でもつても知られるであらう。

序 講

新しいアングロ・サクソン哲學の動きは傳統なくしてあらはれたのではない。迺れば英國の經驗論がその源である。「分析哲學」や、「言語分析」の名でよばれるこの哲學は新しいよそほひをなした經驗論なのである。たゞふるい經驗論によれば、數學や論理學の、經驗から獲られない必然的な命題にたい

し、十分な答へをあたへることができないのにたいし、この新しい哲學は満足すべき解答をそれに與へるであらう。また、ロックやヒュームの經驗論のなかには懷疑論にむかふところの傾向があるのにたいし、このあたらしい哲學はそれを窮極的に克服するであらう。この哲學の動きに影響を與へた思想的巨人としてはパース、G・F・ムーア、ラッセル、ウィットゲンシュタインなどがある。講義はこれらのひとつとの思想の分析にそつてのべられた。

パース (Charles S. Peirce)

パースは不遇なしかしアメリカがもつた哲學の巨人であつた。影響は多方面であつた。ジェームズはパースの友人であり、プラグマチズムはパースから發する。近代論理にも影響をあたへた。しかしパース自身は論理實證主義者ではなく、ヘーゲルに似た形而上學をもつてゐた。パースの論文「いかにわれわれの觀念を明晰にすか」、がわれわれ受講者に渡され、「明晰」について問ふことから教授の講義ははじめられた。デカルト等合理主義者がいふところの精神の眼による第一原理についての明證的な認識、それが果して可能であるものかどうかについて、それぞれの意見がわれわれの間からだされ、討論がなされた。パースの論文は合理論の拒否からはじまる。しかしその拒否の論理的な根據はそれほどまでにあきらかではない。合理論によればひとつとの間の意見の一致がえられず、科學のより十分な意見の一致を目ざす進歩がはじまるといふだけにとゞまる。

ついで實用主義的格率について、その分析と批評にすゝんだ。實用主義的格率は「ある対象についてのわれわれの觀念はその対象の結果（あるひはそれの現象）の總體についての觀念である」といふことである。しかし対象がこの總體と全く同一であるのか、あるひはこの總體の背後にのこる物自體のごときものであるのかが明かでない。パースはこの兩方をともに主張しているかにみえる。又、眞理の定義において、「やがて、the long run 普遍的に信じられるところのもの」といふが、やがてがどれほどの長さであるのかあきらかではない。それは「今ブラックが京都にゐる」といふ命題が百萬年後はみんな信じられるとでもいふのであらうか。子供の喧嘩で、「あなたは馬鹿よ」「嘘」「馬鹿よ」「嘘……」といふが、これはいくらくり返しても同意には至らない。しかも大人の世界のヴァイタルな問題についてもかうしたことがあるのである。パースは科學への信頼にあやまたされた。科學の進歩を信じてあまりに樂天的な眞理觀を抱いたのである。

論理實證主義（驗證原理）

「驗證原理 Principle of Verifiability」の歴史には四段階がある。その頂点をなすのはウィットゲンシュタインの影響をつよくうけたシユリツクであるが、ウィットゲンシュタイン自身は神秘主義的な反科學主義であり、シユリツクの徹底した科學主義となつてゐる。(1)「驗證原理」はロツクやヒュームの經驗主義の中心をなしている。「あらゆる知識は經驗から導きだされる」。しかしこのことゝ經驗とが言葉がすでに漠然として

ゐるばかりでなく、經驗と知識との間の關係もあきらかでない、またこの教説そのものが經驗からえられる命題であるのかどうか、それも疑はれる。(2)次の段階はマッハ、ペアソン、ラッセルに代表される初期の論理實證主義である。マッハによれば、科學の法則は感覺の印象を記述するための一種の「速記法」である。しかし、速記によつて書かれたみづかいかい文章——Water is wet——その感覺印象についての長い文章に書きなほす場合、絶望的な困難が生ずる。素朴な論理實證主義は高い次元の言語を初めの感覺印象の言語に翻譯する點で仆れるのである。知識についての學說——認識論——から意味についての學說——意味論——への轉回、それがふるい經驗論からあたらしい實證主義への大きな飛躍的歩みであるといへる。(3)徹底的論理實證主義。シユリツクの「命題の意味はその驗證の方法である」といふ陳述で最もよくその立場がよい表はされてゐる。この原理によれば、宗教、倫理、形而上學の諸命題はいかなる意味においてもその驗證の方法がないゆゑ、それらすべては意味をもたぬものである。しかし重大な困難が、この原理のなかにある。まず、誰れによる驗證でそれはあるのか？ 各個人々の私的經驗に訴へる驗證であるのなら、獨我論の危険がいつもそこにある。また、一般的陳述に關してもその驗證は經驗によつてはいつまでも不可能であらう。ウィットゲンシュタインは「Water is wet」といふような命題は假設であり、従つて自然科學自體も假設であり、科學は定義により無意味、すなはち驗證不可能であるといふ。かれは反科學的なのである。(4)カール・ポPPERは驗證 Verifiability の原理の代りに——かれはは

じめから驗證の原理をみとめない——principle of falsifiabilityをたてる。たゞ一つの例によつて、一般的陳述は偽となり得るものである。驗證の原理によれば、個々の事例から歸納(述記)によつて一般的命題はえられたものであるゆえ、その驗證はこの無限個数の事例によらなければならない。ポッパーによれば、一般的命題ははじめから個別的命題と次元の異なるものである。但しいかなる事例があれば、それは偽となるものである。常に明らかに記述されていなければならない。しかしこの偽とするところの例が見いだされないかぎりわれわれにとつて一般的陳述は有意味なのである。この手の込んだ議論によつて、しかしながらはじめの實證主義のもつつよい魅力は失はれた。

G・E・ムーア (G. E. Moore)

ウットゲンシュタインがそのあとをつぐまで、ムーアはケンブリッジ大学の教授であつた。今日ムーアの説をそのままにとるひとはまずるまいであらう。しかしムーアはその講義において、絶大の影響をひとびとにあたへ、あたらしい哲學の議論のひとつの模範をひとびとにあたへた。ムーアは、ヘーゲリアンであるブラッドレーとまつたく對立する。ムーアの影響でラッセルもまたヘーゲルからはなれた。「わたしは身軀をもち」などほとんど言ふにあたいしないほどにあたりまへとおもはれる、日常的真理 Truisms のいくつかをムーアは數へあげる。常識は誤らない、それがムーアの立場である。だが、ムーアはさういふ真理をたゞ主張するだけで、その證明を見出すことはで

マックス・ブラック教授の講義(アメリカセミナー)をきいて

きない。ムーアの説は宗教の教義よりもつと獨断的である、(ウィズダム)。しかしムーアはだれもが思ひ切つてさうと主張する勇氣のなかつた真理を、裸の王様を指さして裸だと言つた子供のような卒直さでさうと述べたのである。それは十分に常識的な眞理を眞理としてゐるもの、それはわれわれがふだん用ひてゐるところの日常言語である、といふ大切なかんがへをムーアは示唆した。しかしムーアはのちのひとびとがなす言語の分析をこのまず、その代り、命題(概念)を分析する。命題はフレーゲにとつてとおなじくムーアにとつても萬人の目の前にある或る客觀的なものである。しかし、このかんがへは、のちのひとびとによつて棄てられる。またムーアは、「これは手である」といふような單純な命題も分析する必要をみとめる。手といふ物質的對象は感覺所與 Senses-data の束に分析される。しかしこの分析は、直ちにおおくの困難に導かれるであらう。ブラック教授は感覺所與の言語はもともと不可能な言語である、と主張された。Truisms の擁護がいろいろアングロ・サクソン哲學によつてなされた。ブラック教授は範例的事例という考へをたされる。目の前に扇をみて、「これは扇である」といふとき、われわれはデカルトがなしたやうにそれについて誇張して疑ふことはできない。われわれはさういふ權利をもたない。このことは懷疑論から經驗論を日常言語によつて救ふことなのである。

ラッセル (Bertrand Russell)

記述理論——それは定冠詞 "The" をふくむ名詞句について

の分析であるといへばきりきりげなくさへ入る。だが、それは驚くべき理論なのであつて、哲學の「分析の範型」である（ラムゼー）。この理論の根本の思想は「命題のなかの言葉 words のひとつひとつが必ずしも實在のものゝ指示しているのではない」といふこと、文章の文法的形式は論理的形式と異り、言語は心とを誤らせる形ちをさつてゐるといふことである。たとへば「The present King of France」は不完全記號なのであつて、2+3といふ場合の記號「++」とおなじく、文脈を俟つてはじめて意味をもち、なにか實在のものゝ示してゐるのではない。ラッセルの「記述理論」はマイノングの理論に反對して書かれた。しかしながら、なぜ、マイノングのいふ Substance —— 半ば影のごとき存在物 —— をこの世界から追放しなければならぬか、その理由はそれほど十分にあきらかではない。しかしこの理論の背後にあるこの觀念は健全で大切であると教授は述べられた。

型の理論——記述の理論や型の理論についてかくのごとき明晰な講義をわれわれは他のだれからもきくことができないであらう。殊に型の理論は探偵物語をきくおもしろさがあつた。古來からの論理學上重要なたとおもはれるパラドックスを教授はつきつきにあげられ、さいごに「型の理論」によつてそれらがいかに解かれるかをしめされた。博士自身の工夫になる圖書館館員のパラドックスもあげられた。この「型の理論」によつて形而上學の陳述はすべて論理的に不可能となる。それは形而上學が宇宙の全體について記述しようとするからである。われわれは Anything についで語りながら、Everything についてはそれ

らを同時に語りえない。この理論は、ある意味で、All についてのわれわれの妄想をとくのである。

これら「型」と「記述」の理論から現代哲學のあたらしい動きは出發する。しかし、おなじく常識の立場から出發しながら、ラッセルはムーアと異なり、常識からはるかに隔つたところに至りこの常識の再構成を以て哲學の眞理とみる。その點、ラッセルと G・E・ムーアやウィットゲンシュタインとは、すばしく對立するのである。

ウィットゲンシュタイン I

ウィットゲンシュタインの變貌は例のないものである。ヘーゲルがその一生のうちマルクスにかはつたほどにウィットゲンシュタインの初期と後期はかはつてゐる。初期の思想のすべては Tractatus logico-philosophicus にもられてゐる。第一次大戦、原稿を背負つたまゝ捕虜となつたウィットゲンシュタインは收容所でその完成にとめた。エペケラムの形式でかかれ、その効果は東洋の水墨繪に似てゐる、とブラック教授はかたられた。教授がこの書物の注釋をかきはじめてから十五年、いまだに完成をみないともかたられた。それは七つの封印をもつた難解な書物なのである。ラッセルの仕事はこの書で完成した形があたへられる。しかし、それと同時に、そこではラッセルのプランとその歸結そのものが破壊されてゐる。この書のはじめに、「世界は事實の總體であり、物の總體ではない」とかかれてゐる。どうしてさうなのか、それについて、論理的な證明はかかれてない。たゞそのように主張されてゐるだけである。

この書は世界がどのやう "how" であるかを説明するのではなく、どのやうでなければならぬかを示さうとしてゐる形而上學的な書物なのである。しかし、なぜ物がでなく、事實がもつとも根本的な觀念である、とされるのか。教授は「物の宇宙のリスト」と「事實の宇宙的記録」、あるひは「物語」の例によつてそれにくれた示唆をあたへられた。前者によつてわれわれは世界がいまどのやうであるかを、すなはち、動物園で踊りををどつてゐる河馬やおしやべりをしてゐる猿、のことを知りえないであらう。それをしるのは、後者の宇宙の物語り universal story によつてである。この物語りは永遠の相の下でみられた全宇宙の事實についての記録 chronicle である。——ところで時間あるひは變化に關する事實はたしかにある。しかし、この事實自體は時間と變化から超越してをり、また相互に獨立してをり、相依存せず原子的である(論理的原子論)。しかしながらこの事實は單純ではなくて、單純であるのは對象であり、無色で無時間的なこの對象の結合から事實は複合されてゐる。事實のなかにおけるこの對象の結合の仕方異なる文章は繪画のようにそのまゝに映してゐる (picture-theory)。しかし、實在と文章との關係に關していへば、實在と文章とのあいだのこの表現關係をわれわれは言葉でいい表はすことはできない。この世界の論理的形式はみづからをわれわれの言葉のうちに示す show itself のであつてわれわれの言葉ではいい表はせない。ところでこのやうな命題をのべるウィットゲンシュタインの陳述自體が言はれないものをいい表はさうとしてゐるのではないか、すなはちノンセンスを言つてゐるのではないか、といふ疑

マックス・ブラック教授の講義(アメリカセミナー)をきいて

ひが當然おこる。ブラック教授は將棋盤も使はない極端な將棋の遊びを例に採り、それに注釋をくはへられた。ウィットゲンシュタインの哲學の方法は言語のゲームにおいて、規約からはずれたこのようなゲームの進め方により、ふつうの規約にしたがふ遊びにひとびとをつれもどし、このふつうの規約がどのやうなものであるかを示さうとするやり方である、といはれた。

ウィットゲンシュタイン II

後期のウィットゲンシュタインについて——講義のなかで多くの示唆はあたへられたが——われわれはほとんど聴くことが出来なかつたことは残念であつた。たゞそれについてウィットゲンシュタイン未刊行のブルー・ブックのプリントがわれわれの手に渡され、教授のいくつかのコメントをきくことができた。後期のウィットゲンシュタインには重大なかんがへの變化がおこる。意味川命名 *naming* のかんがへがそこでは棄てられ、それに従ひ、「事實」の概念や言語繪画の説も完全にすて去られる。この後期のウィットゲンシュタインの影響から今日の日常言語哲學はおこつた。ウィットゲンシュタインはその口述の講義においてひとびとに異常な個人的影響を與へ、その影響は、今日のオックスフォードの哲學者たちにも及んでゐるのである。——受講者のひとりびとりはブラック教授の講義からそれぞれに強い刺戟をうけられたこと、おもふ。われわれとしては高田、野田、今谷の各教授がすゝんで講義に出席され、活潑にわれわれとともに、質問をされ討論をされたことは、われわれにとり、ひどく印象的であつた。

(筆者 九州大学文学部(倫理学)講師)